

「がんばっている」ことが大事と教えることは教師の仕事

◆ 子どもの日常の言葉で気になるのは、「がんばってもだめ」。その言葉の場面には教師や親の「がんばれ」がある。そして、いくつかの場面で、「がんばれ」と励まされ成果をあげてきたという履歴もある。回りの大人も、「頑張れ」の効果があるので口癖のように伝える。「がんばってもだめ」と思わせないようにする・・・このことを考えてみた。

◆ がんばっているのに成績がおもわしくない子は、学級の中にたくさんいる。教師の目は、がんばりより成績に目がむく。がんばれば結果が必ずよくなるという前提で子どもを見る傾向が強く、結果がでないと認められないという雰囲気がある。しかし、大事なものは、結果でない。過程である。結果はすぐにでなくても、がんばっている姿が大事であると教えることが、次のがんばりにつながる。

◆ 「がんばっていることが大事」ということを教え続けたお父さんがいる。ある時、漢字のテストが五〇点。持ち帰ったテストを机の引き出しの奥に詰め込もうとした。」その姿に気がついて、お父さんは、息子に、「テストを見せてごらん」と言って、一緒に見直しをした。テストの前の日に覚えた筈の漢字が書けていない。書き違いがある。しかし、苦手な漢字は書けてる。結果としては五〇点だが、息子にしては、よくやったと思えた。お父さんは息子に、

「先生からのテストは五〇点。それは、間違いが半分 あるから。お父さんはこのテストに八〇点をつける。なぜなら、がんばって漢字の勉強をしたから。」と話をした。息子は、気持ちを落ち着け、その後、お父さんの点数を励み、勉強を続けた。急に成績がよくなったという訳ではないが、勉強は嫌いと言わなくなったというお父さんの話が印象に残っている。

保護者会でこの話をした。すぐ、効果があった伝えてくださった。お父さんの気持ちのなかに、ゆとりが生まれたからであろう。

◆ 学校でも、「がんばり点」のようなものがあればいいなと思って実践したことがあった。それは、日記をコメントや学習ノートの赤ペンに、「この間のがんばりに先生は感動した。きっと、あのがんばりが、あなたの宝になる」というように意味のことを書くことだった。「先生はぼくを見ていてくれる」ということが一番の力になる。「がんばっている」ことが大事と教えることは教師の仕事である。